交錯する眼差し

琉球・沖縄・東アジア島嶼地域と英米文学

原田範行

＊本稿は、日本英文学会第 92 回大会における掲題の特別シンポジウムにおいて、司会者である原田が、シンポジウムの趣旨説明の後におこなった発表「語られる琉球と日本―イギリス文学の舞台として」の要旨をまとめたものである。

17 世紀から 18 世紀にかけての近代イギリス文学において琉球や日本が重要な意味を持つのは、それが、当時の文章の中で実際に語られていることにある。市民革命やペスト、王朝の交代、議院内閣制、産業革命などといった社会的動向とその中で生み出された文学作品を、地球の反対側から、ある距離をもって見渡しつつ研究するというのではなく、向こうから来航者がやって来て生み出された作品世界がそこにある、と言ってもよいだろう。ロンドンの王立取引所を歩くスペクテイター氏は、1711 年 5 月 19 日、「日本人とロンドンの議員の間で交渉が成立したのを耳にしては、嬉しく思う」と記しているが、もちろん、そんなことはあるはずがない。あるはずはないのだが、しかし、当時のイギリスにあって、社会風俗を記して多くの読者を得ていた雑誌『スペクテイター』には、確かにそういう文章が記されているのである。日本が架空の国でないことは、さすがに読者も了解済みであろう。そうであるとすれば、この文章の根底には、日本とイギリスを結ぶ何らかの現実的な接点があったはずであり、しかもそれは、この文章を記したジョウゼフ・アディソンのみが辛うじて知りえたような小さな接点ではなく、より広がりのある、確実なものであったと考えてよいであろう。このような意味において、日本の表象は、黎明期の近代イギリス文学において、ある重要な役割を担っていたのである。

島田孝右氏の『日本関連英語文献書誌 1555-1800』を見ると、18 世紀初頭の 20 年間だけでも、日本への言及がみられる英語文献は、先に触れた『スペクテイター』誌を含め、ゆうに 200 点を越すことが分かる。もっともこれは、「日本」への言及であって、「琉球」や「沖縄」に特化したものではない。大英図書館には、”A Chart of the Loochoo Islands: drawn about 1680”という地図が所蔵されているが、これをもって「琉球」が、当時のイギリスおよびヨーロッパの読者一般に、明確な姿をもって認識されていたとは考えにくい。「琉球」周辺の地理的状況がヨーロッパの一般読者にもある程度明らかになってくるのは、やはり 18 世紀半ば以降のことである。1722 年、宣教師として北京に赴き、59 年に亡くなるまで中国で過ごしたフランスのアントワーヌ・ゴービルが琉球のことを紹介し、その後、やはりフランスのラ・ペルーズが、探検航海の途上、南西諸島を経由してその記録を残している。イギリスでは、海軍士官のウィリアム・ロバート・ブロートンが、1793 年から 98 年にかけて、北大西洋の調査の後、太平洋を横断して東アジアの探検航海を遂行し、その途中、室蘭、箱館、仙台、那覇、宮古島などに寄港した。彼は、イギリス帰国後に著した『太平洋北部海域の発見航海』において、船が宮古島沖で沈没した際、宮古島の住人から手厚く保護されたことなどを記している。イギリス外交団を清朝中国へ送り届けた後、調査のために那覇に立ち寄り、ここにひと月以上滞在したバジル・ホールによる『朝鮮・琉球航海記』（1818）が、好評をもって迎えられ広く読まれたことは言うまでもない。

このように見てくると、イギリスにおいて「琉球」がはっきりとした像を結んでくるのは、18 世紀末から 19 世紀初頭のことと考えられるのだが、名称はともかく、九州の南西にあって、台湾の北東にある島々のことが全く知られていなかったかというと、そうではない。18 世紀初頭に多くの世界地図を刊行し、ジョナサン・スウィフトの『ガリヴァー旅行記』（1726）でも言及されているハーマン・モルのアジア図には南西諸島が記されているし、また、作り話でありながら多くの読者を得たジョージ・サルマナザールの『フォルモサ』（1704）に付された地図にも、同じように九州と台湾の間に、島々がはっきりと記されている。そういう 18 世紀初頭のイギリスおよびヨーロッパによるこの地域の理解は、確かに、事実認定という点では、あまりにも漠然としてはいる。だが、この漠然とした理解が、曖昧さをはらんでいるがゆえに、旅行記という形で小説執筆を進めつつあった当時のイギリスの文人たちのインスピレーションを豊かに喚起していたとするならば、そうした文人たちの南西諸島に関する理解は、漠然としたものであったがゆえに、逆に、新たな意義を持つことになる。

サルマナザールの『フォルモサ』が作り話であることは既に述べた。とはいえ、この作品が、刊行直後から広くイギリスの読者に受け入れられ、フランス語やドイツ語にも次々に翻訳されたという事情から判断できるのは、風俗・習慣に関する詳細な描写が、フォルモサ（台湾）周辺地域へのイギリスの読者の関心を強く刺激し、たとえフィクション的要素があろうとも、異文化へのさまざまな想像力を惹起したことによる、と言えよ

う。『フォルモサ』の記述がまったくのフィクションである、というのは、今日の私たちが下す判断であって、事態はもう少し複雑であった。比較的少ない情報を集約しつつ、「そういうことがありえるかも知れない」という方向に記述を導くことで読者を誘い込む—そういうまさにフィクション的手法において、サルマナザールは見事に成功したのである。だから彼の記述は、まったくのフィクションとは言えない。虚実ないまぜなのである。フォルモサの島々のことを、サルマナザールは次のように記している。

> フォルモサと日本が、東洋でも最も離れた場所にあることは、すでに発見され知られている。つまり、最初に朝日が昇るところ、というわけだ。フォルモサの北側、二百リーグほどのところに日本があり、また中国は、フォルモサの北西、約六〇リーグである。（略）フォルモサは、五つの島からなっており、そのうちの二つは「アヴィアス・ドス・ラルドノス」もしくは「盗賊島」と呼ばれ、三番目の島は「グレイト・ギリー」あるいは「ペオルコ」、四番目は「リトル・アジー」もしくは「ペオルコ」と呼ばれている。五番目の、真ん中にある島は「カボスキ」もしくは「中心島」と呼ばれ、五つの島々の中では最も大きく、長さは一七リーグ、幅は一五リーグ。厳密にはこの島のことを、「ゴッド・アヴィア」もしくは「フォルモサ島」と呼ぶ。（Psalmanazar, *Formosa* (1704), p. 2 より拙訳による引用）

九州がフォルモサの北側、約 200 リーグのところにある、というのは、実際に当時の地図から見ても、概ね、事実と言ってよい。中国がフォルモサの北西 60 リーグというのもそうだ。だが、サルマナザールの描くフォルモサは、五つの島々から構成されていて、「中心島」がその中央に位置しているということになっている。もちろんこれは作り話だ。『フォルモサ』に付された地図を見ると、サルマナザールの言う「フォルモサ」が、実際の台湾とは異なり、いわば南西諸島に張り出した形になっていることが分かる。『フォルモサ』には、その副題に、「日本の皇帝に服属する島」という表現があり、実際、この作品の大半は、フォルモサの独自な風俗・習慣を、日本と比較しながら説明するという体裁を取っている。明代の中国では、沖縄を「大琉球」、台湾を「小琉球」と呼んでいたから、そうした呼名の残る文献の影響をサルマナザールが受けていたとすれば、『フォルモサ』に記された内容には、実は琉球に関するものが含まれていたとも考えられるのである。

サルマナザールの描いた、この「フォルモサ・琉球」的フィクションは、実に興味深い形で、イギリス文学史上の名作にもかかわっている。『ガリヴァー旅行記』だ。周知の通り、この作品の主人公は、作品の第 3 篇で、空飛ぶ島ラピュータの後、バルニバービやラグナグといった、太平洋の島々を巡って、最後に「日本」を訪れる。「日本」滞在記の中心は第 3 篇最後の第 11 章で、これは、全篇を通じて最も短い。だが「日本」は、ガリヴァーが訪れる作品中の「遠い国々」の中にあって、言うまでもなく、唯一の実在の国であるし、実際、作品中のあちこちに顔を出す。リリパット（小人国）からイギリスへ帰国しようとするガリヴァーを救出したイギリス船は「日本」からの帰途にあったし、ブロブディンナグ（大人国）の位置は、カリフォルニアと「日本」の間に想定されている。主人公の「日本」滞在記は、作品中、確かに最短の章であるが、この作品における「日本」の役割は、どうもそれだけにとどまるものでないらしいことについては、既に多くの指摘がある。

『ガリヴァー旅行記』の成立に「日本」が重要な役割を担っていたとすれば、主人公が、「日本」人の海賊の船長の許しによって生き延びることから始まり、最後に彼が「日本」を訪れることになるこの作品の第 3 篇には、新たな視点からの考察が必要となろう。特に、「日本」はともかく、それ以前に主人公が訪れる太平洋上の島々の意味は何か、ということである。『ガリヴァー旅行記』には、各篇の冒頭に、主人公が訪れる地域を表現した虚実ないまぜの地図が添えられているが、例えばこれを、『フォルモサ』に付された「フォルモサ・琉球」の地図と比較してみると、九州の南西に展開する「フォルモサ・琉球」と、九州の南東に展開する「ガリヴァー来訪の島々」がちょうど鏡像のような関係になっている、ということが分かる。たんに、位置関係が鏡像に近い、というだけではない。サルマナザールの『フォルモサ』が話題になっていた頃、イギリスの王立協会は彼を招聘し、『フォルモサ』の真偽をめぐる公開聴聞会を実施しているが、ガリヴァーの訪れるバルニバービ（ラピュータの下にある島）にある「アカデミー」は、まさにこのイギリス王立協会の突飛な実験や研究を批判したものである。つまり、この地理的な鏡像関係は、『ガリヴァー旅行記』の作者スウィフトの、いわばサルマナザール現象への諷刺であったとも考えられるのである（John Schufelt, “The Trickster as an Instrument of Enlightenment,” *History of European Ideas* 31 (2005), 162-65 などを参照）。そういう創造的想像力をスウィフトが有していたとすれば、サルマナザールの曖昧模糊とした「フォルモサ・琉球」は、『ガリヴァー旅行記』のラピュータ、バルニバービにも重なり合ってくることになる。イギリスにおける近代小説黎明期の、こうした空想的言説空間は、「琉球・沖縄」をテーマとした第 92 回日本英文学会大会特別シンポジアムに、思わぬ形でその先ぶれ役を果たしていると思われるのである。